＼ 知っている世界の、外へ ／

旅に出て、「私」が始まる

旅という非日常では、自分の心のありようにも変化が生じるような感覚になることがあります。
旅を通じて「自分の当たり前」の外に出た人は、どのような景色を見て、何に気づいたのか。
さまざまな旅をしてきた5名にお話を聞きました。

File.1
通学路から幕末の京都へ。「好き」で旅して「好き」でまちを知る

かどかわ・まき●京都生まれ。旅行代理店に勤めた後、まいまい京都に転職。600人を超える各分野のスペシャリストが独自の視点でガイドするまち歩きツアーを運営する事務局兼同行スタッフとして働く。

世界有数の観光地、京都。世界中から旅行客が集まり、神社仏閣を中心に歴史的価値の高い建物も多くあります。しかし、京都で生まれ育った私にとっては、どれも身近な光景。言ってしまえばありふれた日常のひとつでした。

それが一変したきっかけは、ある漫画に出合ったことです。高校2年生のとき、新選組をテーマに幕末を描いた渡辺多恵子先生の『風光る』という作品を知りました。そのストーリーや世界観に私は夢中になりました。

ある日、いつも通り学校に向かおうと、自転車をこいで鴨川沿いを通っていたときのことです。ふと目の前の景色と、漫画に描かれていた京都のまちが重なりました。ああ、ここはあのシーンで描かれていた場所だと気づいたそのとき「かつてこの道を、たしかに沖田総司が歩いていた」と突然実感したのです。そのときの驚きは今も忘れられません。100年以上前、ここは間違いなく激動の幕末史の舞台だった。頭ではなく肌でそう感じました。

それからというもの、私は漫画に登場した新選組ゆかりの地を旅しました。旅、といっても遠くに行くのではなく、それまでも何気なく通り過ぎていた地元の範囲内を巡るだけです。しかし『風光る』の視点で見つめれば、目の前に隊士たちの行き交う姿が見えるようでした。

新選組の名を轟かせた池田屋事件。その舞台となった池田屋跡地は当時パチンコ店になっていました。しかし、その場に足を運ぶと「この道を歩いてきて、ここから討ち入ったのだ」と、隊士たちの動きが想像できるような発見がありました。本で読むのと、実際にそのまちを歩いてみるのとでは、まったく感覚が違ったのです。次の通りで誰が待ち伏せしているのかわからない幕末の緊張感を追体験するかのようで、ゾクゾクしたのを今でも覚えています。まるで自分の足で、幕末の京都を旅するような感覚でした。

高校時代、通学路として毎日通っていた京都・鴨川。まいまい京都では、鴨川周辺を案内するツアーをたくさん企画している。

さまざまな場所を巡るたびに私の「好き」は膨らんでいきました。『風光る』の舞台である京都を巡るオフィシャルツアーの存在を知り、高校生ながらたった一人で参加したことも。まさか自分にそのような行動力があったとは。一般公開されていないような場所でも、知り合いのつてをたどって個人的にお願いすると、快く見学させてもらえたこともありました。高校生の私には緊張する経験でしたが、こうした経験を通じて対人力や交渉力も磨かれていったのかなと思います。それまで家と学校の往復で世界が完結していた私にとっては、近所とはいえ、どれも大冒険です。普段なら関わることもない、幅広い年代の人たちと出会い、「好き」を通じ

取材・文／塚田智恵美　撮影／増田えみ（11ページ）、小森園 豪（12ページ）

て深く交わる楽しさを知りました。こうした原体験から旅を仕事にしたいと、大学卒業後は、『風光る』のオフィシャルツアーを企画した旅行会社に就職することになりました。

それから世界中を旅してきました。旅行会社に勤めて8年経ったころ、「まいまい京都」の存在を知ります。まいまい京都が提供するまち歩きのミニツアーは、ある分野のスペシャリストが独自の視点でまちをガイドするのが特徴です。「まいまい」とは「うろうろする」という意味の京ことばで、その名の通りどこか遠くに行くようなツアーではありません。しかし狭い範囲をうろうろするだけでも、視点を変えれば無限にツアーができるのです。苔が好き。建築が好き。高低差といった地形の特徴が好き…。何かを強く愛する人の視点で見れば、同じ場所でもまったく違うまちの表情が見えてくる。つまり、同じ場所でも何万通りの旅ができるということ。衝撃を受けました。はじめは偵察のつもりが、気がついたら転職して、今ではまいまい京都のツアー運営に携わっています。

島原に残る唯一のお茶屋、輪違屋。高校生のとき『風光る』のツアーで訪れて以来縁が続き、まいまい京都でも輪違屋へのツアーを企画した。

自分の「好き」や、誰かの「好き」。深い「好き」の目で見れば目の前の景色が変わり、見えなかったものに気づきます。その場所を自分の足で歩き、匂いや音、五感でまちをとらえながら、〝ある視点〟からそのまちを体感する。「好き」を求めて旅していると、導かれるようにして、普段会えない人と会えたり、普段味わえない体験ができたりして、世界が広がっていきます。

ぜひ高校生にも、自分の「好き」から始まる旅を計画してみてほしいです。自分の見たいものを見る。そのためにはどの道を歩くのが良いか、どこで休憩するか。自分で計画すると、思い通りにいかないこともあるでしょう。しかし自分で考えて、自分と対話しながら歩いた時間はきっと人生を豊かにしてくれるはずです。

遠くに行かなくても、きっと旅はできます。通学路を歩くだけで、100年以上の時を超えて幕末を旅することだってできたのですから。

File.2

1741の市町村を巡る旅。見える世界の「外」に触れどう生きたいか考えた

にしな・かつすけ●1996年生まれ。大学在学中に市町村一周の旅を始め、2020年1月に全国1741の市町村巡りを達成。旅の記録をまとめた本『ふるさとの手帖』（KADOKAWA）を出版。

岡山県倉敷市で生まれ、自分の生まれたまちからほとんど出ることがなく育ちました。高校卒業を機に、地元を出て広島大学に進学。周りの学生たちからこれまでどの国に行った、どの土地を巡ったなどの旅行話を聞いて「みんな、そんなにいろいろな場所に出かけているんだ」と衝撃を受けました。自分ももっと広い景色を見てみたい。そんな思いから、大学1年生の夏休みにヒッチハイクで九州を一周することにしました。

車に乗せてもらっている間、窓の外を見ながら「通過するだけで、この土地のことを僕は何ひとつ知らないんだな」と思いました。九州の旅から帰り、もっと日本のまちを見てみたいと思っていたとき、ふと「日本の市町村っていくつあるのだろう」と疑問を抱いて調べてみることに。なんと1741もありました。1日も休まず、毎日1カ所ずつ回ったとして、5年弱はかかる数です。「すごい数だな。この単位で旅をして、すべて回りきった人はいるのだろうか」。そう思うと同時に、僕には「回ってみたい」という気持ちが芽生えてしまっていました。

それから2年かけて旅の準備をし、学業と両立しながらアルバイトで旅の資金を貯めました。

ただ通過するのではなく、一つひとつの土地で写真を撮影したいと考えました。1741の市町村の写真がすべて揃って、見た人が「あ、私のふるさとがある」と自分の生まれたまちを探してくれる様子を想像したら、なんだかロマンを感じたのです。写真と文章をウェブサイトにアップしながら旅をできるように、独学でウェブサイトの作り方を勉強し、自分のサイトを作りました。

2018年3月、大学4年生になる年を1年間休学して、僕は全国の市町村を一周する旅を始めました。相棒は原動機付自転車のスーパーカブ。いざ全国へ、と出発した初日にカブで転倒。旅にはハプニングがつきものとは思って

◎写真家
仁科 勝介さん

※登場する市町村数はすべて本人調べ（当時）です。

いたものの、まさか初日の夜に病院の天井を眺めることになるとは…（笑）。

なぜ、わざわざ市町村一周の旅をするのか。そんなことをして一体何になるというのだ？ ――そう疑問に思われる方もいるかもしれません。多くの友人は就活を終えたタイミングで、大学生活最後の1年を満喫しようとキラキラ輝いていました。一方、僕は本当に完走できるかもわからない、気の遠くなるような旅に出かけようとしている。

僕自身がしたくて始めたことですが、旅に出た直後は「この旅をして一体、何になるのだろう」と思う気持ちがないわけではありませんでした。その不安の裏返しで「この旅を完走できたら、自分というものが見つかるのではないか」といった期待や、何としても成し遂げなければと気負うような気持ちもあったかもしれません。

市町村一周の旅で最後に訪問したのが鹿児島県の屋久島。彩雲とよばれる虹色の雲を見た、その光景は忘れられないという。

その気持ちがすっと晴れたのは、夏ごろでした。当時、僕は北海道を回っていたのですが、北海道だけで179もの市町村があります。途方もないような気持ちになりながら、毎日一つずつコマを進めるような気持ちで進んでいた、その北海道を回りきったときには達成感とともに、ハッとするような感覚がありました。

全国の市町村を一カ所ずつ回るなかで、僕が目にしてきたこと。それは、どの土地にも当たり前のように「そこで生きる日常」があるということでした。この旅をしなければ僕が一生訪れなかったかもしれない場所で生まれ、育ち、働いて、暮らしている、それぞれの人生がある。

旧市町村と政令指定都市を巡る旅では船に乗り、旧御所浦町へ。平日の朝なのにほぼ満員。仕事や釣りに行くための生活の船だ。

その光景を各地で目の当たりにするたびに、僕は「なんて果てしないのだろう」と思いました。生まれてから人生が終わるまで、自分に見える世界がいかに狭いか。世界とは目にみえる範囲のことではなく、その「外」に際限なく広がっている。そこに無数の命があり、当たり前のように生活が続いていく。こう思えたとき、僕はなんだか自分が楽になるような感覚を覚えたのです。

この感覚を言葉で伝えるのは難しいですね。例えば僕は最近、熊本県天草市の棚底港から船に乗って、旧御所浦町を訪れました。平日の朝7時45分発の船はほとんど満席でした。30代から50代の男女も多く、見たところ遠方から訪れているのはおそらく僕だけ。狭い船の中で地元の人たちが「おはようございます」と挨拶しあっています。この船に乗って仕事に向かう生活がそこには当たり前のようにあるのです。僕には衝撃でした。「自分に見える範囲は、実はものすごく狭い」ということを日々確認し、人生の一回性をしみじみ感じる。すると、そんな限りある人生で、これから僕はどうありたいのだろう。何を見たいのだろう。外から見てどんな意味があるかではなく、自然と自分自身にベクトルが向いたのです。

2年間かけた市町村一周の旅は2020年1月に完遂。旅を発信したサイトは、たくさんの反響をいただきました。その後、旅で撮影した写真と文章をまとめた書籍の出版がきっかけで個展の話をいただくなど思いもよらなかったことがどんどん起きて、フリーランスの写真家として活動することになりました。

そして今、僕は新しい旅の途中です。2023年4月から旧市町村と政令指定都市の区、合わせて2200ほどのまちをカブで回っています。毎日知らないまちに行きます。どの土地にも、当たり前のように僕の知らない日常がある。旅をして知るのは「僕はまだまだ、全然知らない」ということ。世界は果てしない。それを実感するたび僕は「限りある人生のなかで、どうしたいかは、きっと自分の心が勝手に選んでいくのだ」と思います。

やりたいと思うことをやろう。見たい景色のほうに行こう。「知らない」を知るたびに、ふしぎと自分の足が地面をたしかに踏みしめるような感覚になるのです。

仁科さんが制作したウェブサイト『ふるさとの手帖』https://katsuo247.jp

File.3

意思があれば世界への扉は開く 150家庭以上を訪ねた台所探検

◎世界の台所探検家 岡根谷実里さん

おかねや・みさと●1989年生まれ。クックパッド株式会社で勤務、その後独立。世界各地の家庭の台所を訪れて、料理から見える暮らしや社会の様子を発信。

世界の人たちはどんなものを食べているんだろう？――好奇心の赴くままに、これまでおよそ25以上の国と地域を訪れ、150以上の家庭の台所にお邪魔し、一緒に料理をさせてもらってきました。

高校で世界地理に夢中になり、大学では土木工学を専攻。当時は途上国に関わる仕事をしたいと思っていました。転機のひとつは大学院時代にウィーンに留学したこと。西欧、東欧などさまざまな国の友人ができて、バックパックで約30カ国を旅することに。

ボスニア・ヘルツェゴビナ出身の友人に誘われて彼の自宅へ遊びに行ったときは、おばあちゃんが「ピテ」というパイのようなものをはじめ、家庭料理を振る舞ってくれました。私がそれまで知っていたボスニアといえば、紛争で多くの犠牲が出た国。実際、街には弾丸の跡が生々しく残っているところもありました。でも初対面の私にピテを振る舞い、別れ際にはぎゅっと抱きしめてくれたおばあちゃんは、本やニュースを通じて知っていたのとは異なる、優しいボスニアの一面だったのです。日常の食卓からこそわかる、人の表情や暮らしがある。私はそれを知りたい。また、日々の料理が生まれる象徴である台所を通じて大きな社会の動きや、うねりが見えてくることにも気づき、次第に台所探検という形になっていきました。

皆さんは、住み慣れた日本では、強い意思をもたなくても目的地に辿り着

ボスニアでおばあちゃんが作ってくれたピテ。「一緒に食卓を囲んだ人たちがいると思うと、遠くの国を近く感じます」

ウクライナを訪れた際は、現地の人が「朝食に」と言って、チーズを使ったシルニキというパンケーキを振る舞ってくれた。

File.4

休日だけで世界のどこにでも行ける 思い込みを外し、自分を知る旅へ

◎リーマントラベラー 東松寛文さん

とうまつ・ひろふみ●1987年生まれ。平日は広告代理店で働く傍ら、週末で世界中を旅する。12年間で85カ国204都市に渡航。全国各地で講演も実施。

社に勤めながら、週末などの休日を利用して世界中を旅してきました。旅に目覚めたのは、社会人3年目のころ。どうしてもNBA（米プロバスケットボール）の試合が観たくて、週末に有給休暇を足して3泊5日でロサンゼルスに行きました。「平日の仕事に支障がない範囲で旅しても、これほど楽しめるんだ」と驚き、それから旅にのめり込んでいきました。

次第に、旅のもつ効用を感じ始めます。僕たちは慣れた日常のなかでは、ルールを疑うことも、周りの景色をじっくり眺めることもなく、敷かれたレールの上を自動で走る列車のようにも生きることができます。しかし旅先ではそうはいきません。初めて訪れる場所では、外の世界に対して五感が研ぎ澄まされたような状態になります。言語も通じず、地下鉄に乗るだけでドキドキ。目的地に着いただけで成功体験に。そんな非日常のなかでこそ、真の自分と向き合えるのだと気づきました。

2015年のキューバへの旅は忘れられません。音楽が聞こえてきたので民家をのぞいたら、招き入れられて一緒にダンスをしたり、靴が泥だらけになって困っていたら、見ず知らずの女性が靴を洗ってくれたり。現地の人の生活に触れて楽しい一方で、僕はなんだかモヤモヤするような気持ちになっていました。そのモヤモヤは、今思えば「僕の知っている生き方の外に、こんな幸せがあ

旅先では、現地の人の生活が見えるスーパーやレストランに行くのが好き。キューバの旅でも、現地の人との交流を楽しんだ。

帰りの飛行機では、写真を見ながら振り返りをする。「なぜこれを撮ったのかと考えると、自分が心を動かされるものに気づく」

くことができるでしょう。でも、異国では違います。どうしたいのか、自分で意思をもち、伝えないとどこにも行けません。しかし、意思が伝われば意外と助けてくれる人がいます。意思さえあれば、目の前に道が開けていくのです。私が旅先を決めるのはだいたい知り合いのつてからですが、「一緒に料理を作って食べたい」と意思を伝えることで、受け入れてくれる家庭と出会えます。人との出会いによって旅をしていると、自分の予想を超える世界との巡り合いも。一つひとつの選択に意思をもち、世界につながる扉を開いていきたいです。

File.5

人それぞれに「絶景」がある。景色の背景に悠久の物語を求めて

絶景プロデューサー　詩歩さん

しほ●1990年生まれ。累計63万部を突破した書籍『死ぬまでに行きたい! 世界の絶景』(三才ブックス)著者。YouTubeでは「#絶景で学ぶ世界史」の企画を配信。

新卒でインターネット系の広告代理店に入社。新人研修でFacebookのページを作って運用し、いいね! 数を競うことになりました。もともと旅が好きでしたが、いいね!を押してもらうには旅だけでは弱く、海外旅行中に交通事故で九死に一生を得た経験から「死ぬまでに行きたい! 世界の絶景」というコンセプトを考えました。このページがヒットし、のちに会社を辞めて独立。世界中の絶景を撮影し発信する生活が始まりました。

ただ、私自身はもともと遺跡が好きで、その地域のもつ歴史や文化に触れられる旅が好きだったのです。近年「映え」といった言葉が流行り出し、ただフォトジェニックなものだけを追いかけていても誰でも真似できるような時代になりました。では私が思う絶景とは何だろうと改めて考えてみると、景観の美しさに加え、裏側に唯一無二の物語がある光景だと思ったのです。

例えばトルコのカッパドキア。初めて訪れたときは有名な気球に乗って満足してしまいました。しかし、のちにトルコについて学んだことで、じっくり見ずに通り過ぎてしまった洞窟都市のほうが気になり始めたのです。あの洞窟都市は、実は迫害されて移り住んだキリスト教徒が造ったものだった。たまたまそこが、火山灰が堆積してできた柔らかい岩石や凝灰岩だったため、削り出して隠れ場所を造ることができたのだと知り、その物語に私は強く惹かれたのです。昨年再びトルコを訪れ、改めて洞窟都市を眺めたとき、目の前の光景に地球と人の歴史を感じて心が震えました。

絶景というと、ただ「眺めの良い景色」という印象をもつかもしれませんが、人それぞれ何を絶景と思うかは異なります。知りたい。なぜか惹かれる。そんな自分自身の興味や好奇心に素直に従って、新しい場所にどんどん踏み出していった先に、その人にとっての「絶景」――自分にしかできないことや、自分だから見られた景色が待っているはずです。

昨年12月、取材で再訪したトルコのカッパドキア。世界史を学び、その物語に惹かれたことで、そこにある「絶景」に気づく。

ったんだ」という衝撃だったのでしょう。旅を通じて、それまで見えなかった選択肢に気づいたとき、僕たちはモヤモヤし、そのモヤモヤのなかで自分らしい生き方を考え始めるのかもしれません。

旅を通じて自分の幸せを考え続けてきた僕が、それでも会社を辞めない理由は「今の会社に勤めたままで、世界中どこにでも行けるから」。できないと思っていたことが案外できる。本当は今すぐ世界のどこにでも行ける。旅を通じて無意識の思い込みが外れたとき、自分らしい人生が始まるのだと僕は思います。